東アジアキリスト教のベクトル

岡本さえ

キリスト教はどのような態度でアジアと関わろうとしたのか。とくに私たちの住む東アジアで、キリスト教は各宗派や新旧の対立を超えていかなる関わりをもとうとしたのか。キリスト教の東アジア布教の枠組みに焦点をあてたい。

一　カトリック布教の発展

東アジアにキリスト教が伝えられたのは、三世紀から四世紀だと言われている。五世紀にローマ教会のコンスタンチノープル大司教だったネストリウスがエペソ総会議（四三一年）で破門されたが、彼のキリスト論を支持する人たちはメソポタミアでネストリウス派を形成した。キリストは神であるとともに人である、マリアは神の母でないというネストリウス主義は、カルケドン総会議（四五一年）でも異端として排斥されたため一派はペルシアに移住した。

ペルシアのニシビスを中心に信者を集めたネストリウス派は、六世紀末から宣教師をアラビア・トルキスタン・インド各地に派遣し始め、シルクロードを通って唐代の中国にも入ってきた。太宗（在位六二七－四九）の許可を得て六三八年に波斯（ペルシア）寺を建てることができた。ネストリウス派キリスト教を伝えたのは、ペルシアの人で司教的地位にあったアラボン（Araham、漢字名は阿羅本）と言われる。

初めは中国人に波斯景教といわれたが玄宗の時、ペルシアではなくタイシリア（ローマ帝国＝大秦国）から来た教えであることが認められて、七四五年に波斯寺は大秦寺と

改名した。八一年には漢文で書かれ縁に一部シリア文字が混ざった大秦景教流行碑[1]が、首都長安に建てられた。しかし九世紀になると武宗は道教を信じて他教を圧迫したので、景教は八四〇年代に廃された。なお景教は聖武天皇の頃（七三六年）に日本にも来たと言われ、京都の太秦（うずまさ）寺にその痕跡が認められる。

ネストリウス派キリスト教は中世の伝説と結びついてヨーロッパにも大きな影響を与えた。一つは聖トマス伝説であり、もう一つはプレスター・ジョンであった。聖トマスはインドで活躍し没したと伝えられていた。トマスの墓が現在のマドラス付近にあるという伝説もあった。インドに流れて来たネストリウス派は、聖トマスの洗礼を受けたキリスト教徒（トマスキリスト教徒）と緊密な関係にあると考えられた。三世紀頃に起源するトマス伝説は近世まで根強く、一六世紀にインドからモルッカを経て日本に来たスペイン人イエズス会士フランシスコ・ザビエルは、使徒トマスの後継者と呼ばれたこともある。

もう一人のプレスター・ジョンは、ネストリウス派キリスト教を信奉する東方の強い王と言われた。一二世紀の謎の書簡によって生まれた神話だが、イスラム軍を撃破するキリスト信者の王としてほとんどヨーロッパ近代まで信じられていた。王国は中央アジア全体に探し求められ、東アフリカのエチオピアにあるとも言われた。

ローマ・カトリック教会の最盛期は一二世紀で、教皇権は絶頂に達した。インノケンティウス三世（在位一一九八―一二一六）は神聖ローマ帝国を意のままに動かし、ヨーロッパの諸国王に命令することができた。教会が絶対的な権力を握る中で、キリスト教の教団が財を蓄積し世俗化することへの批判が出てきた。一三世紀に福音書の精神に立ち返り自らに清貧を課した托鉢修道会が創立された。ドミニコ会、フランシスコ会、アウグスティヌス会などである。

ドミニクスによって創立されたドミニコ会は、domini（主の）＋canis（犬）と称して清貧・貞潔・従順を守り、托鉢修道会として説教と救霊のために活動した。ドミニコ会は一四世紀初めには修道院五百、会員一万を擁して西アジア・南アジアへの宣教志願者を募集し始めた。

フランシスコ会もまた定収入や不動産を放棄し、貨幣の受納を禁止して説教と勤労奉仕に尽力した。一四世紀には会員数が三万名を超えていた。一四世紀初頭にフランシスコ会の宣教師は、ザイトンと呼ばれた泉州（中国福建省）に来ている。泉州の司教館は教皇クレメンス五世（在位一三〇五―一四）の支持を受けたが、最後のフローレンス神父は一三六二年に殉教した。

一四世紀ヨーロッパは黒死病、百年戦争などに苦しみ、教皇の権力は衰えて教会は分裂した。フランス国王顧問が

教皇を監禁する事件も起こった。一五世紀には全教会の代表機関である公会議がカトリック刷新の役割を担い、教皇も選挙で選ばれるようになった。マルティヌス五世（在位一四一七―三一）は教皇選挙会議で選出された。ドミニコ会をはじめカトリック諸派にも、内部組織や規律の改革運動が起こった。

他方では一五世紀に本格化した大航海時代がヨーロッパ人に広大な地平と天地の展望を与え、キリスト教世界にも大きな影響を与えた。大航海時代以後のキリスト教宣教活動は、ヨーロッパ諸国の勢力拡大と密接に連携して行われるようになる。商業と新天地占領のためヨーロッパ人が海を越えて世界各地に出かけるのと平行して、教皇庁はカトリック国王に布教特権を与える代わりに、キリスト教布教のための資金援助を受け取る方式を取った。

すなわち一四五〇年代にニコラウス五世（在位一四四七―五五）がポルトガル・スペイン両国王に対して、布教地での土地領有と貿易独占権を認めた。九三年にアレクサンデル六世（在位一四九二―一五〇三）は両国に新しい土地でのキリスト教布教を義務づけ、国庫から聖職者の生活費、旅費、教会の建設費と維持費を出させることにした。この決定と並行して、一四七五年にシクストゥス四世（在位一四七一―八四）がフランシスコ会以外の全ての托鉢修道会に対して、清貧の義務を解除している。

二　プロテスタント（新教）とカトリック（旧教）

キリスト教史における大きな事件が一六世紀初期に起こる。宗教改革運動によってプロテスタント、新教徒と言われる信者が現れ、ローマ・カトリック教会に反旗を翻したのである。イタリアで高揚した人文主義は人間は世界の中で自己の運命の主人となることを主張、人々はキリスト教のなかった頃の古代ギリシャ・ローマ世界に親近感を抱いていた。

教皇庁は退廃している、時代の宗教的苦悶に答えるべきだ、聖書を第一にして初代教会の信仰に戻ろう、と叫んで一五一七年マルティン・ルターは九十五カ条を提起し、二〇年にレオ十世（在位一五一三―二一）の破門状を焼き捨てた。カルヴァン・ツヴィングリらが続き、ドイツ・スイス・オランダ・北欧・イギリス・フランスの一部に新教諸派が広がった。

カトリック側ではトリエント公会議（一五四五―六三）が開かれた。ドミニコ会・フランシスコ会・アウグスティヌス会と、一五四〇年に教皇勅書によって公認されたばかりのイエズス会の会員が集合した。トリエント公会議後、カトリック諸派はプロテスタンティズムを強く意識し対抗

するようになる。新天地でのカトリック信者獲得が重要課題となり、カトリック諸国の王もキリスト教海外布教のために、宣教師派遣を要請した。

すでにトリエント公会議のはるか以前からフランシスコ会・ドミニコ会の宣教師は、アジアで活動していた。モンゴルと平和共存の道を探ったインノケンティウス四世（在位一二四三―五四）が派遣した使節の一人は、フランシスコ会士プラノ・カルピーニで、カラコルムまで行ってオゴタイ・ハンの後継者に会い、教皇への返書をもらって帰った。先に述べたように、フランシスコ会士は元代一四世紀初期の泉州に司教として来ている。

一五〇〇年にフランシスコ会士はカリカット等インド西海岸で布教し始め、二年後にはドミニコ会士が来ている。一五二一年にドミニコ会士は中国南部に達した。五六年には同会のガスパール・ダ・クルスがカンボジア経由で広東に到着し、中国に一カ月滞在したが退去させられた。

のちに東アジアキリスト教布教の大黒柱となるイエズス会は、一五三四年にイグナティウス・デ・ロヨラが〔3〕「神のより大きな栄光のため」、フランシスコ・ザビエルら六名の同志とともに創立を誓った新しいカトリック教団であった。ロヨラたちは清貧で貞潔な生活を守るとともに、キリスト教の聖地エルサレムへの巡礼を実現すること、教皇の下で世界的な宣教を行うことを決意した。

イエズス会は布教活動に積極的で地上のどの場所でもすぐ現場に出る方針を取ったので、ロヨラの同志たちは会の公認前から世界に出て行った。ザビエルはアジアに向かい、一五四二年にインドで布教を始め十年間アジアを駆けめぐったが、アンボイナ諸島を経て四九年に鹿児島へ上陸した。日本での布教中にザビエルは、東アジア文化圏で主導権をもつ中国がキリスト教に改宗すれば周辺国は従うに違いないと考え、五一年ポルトガル船で豊後を発って中国へ向かったが入国できなかった。

総長ロヨラの目は東アジアよりも北アフリカに向けられていた。彼はオスマン帝国からの聖地奪還を目指していた。帝国に捕われている同僚ノブレガをはじめとするキリスト教徒を救出したかったのである。スペイン王カルロス一世が一五四一年以来聖地奪還を目標に北アフリカを攻撃していたので、ロヨラは五〇年代にスペイン艦隊出動を期待したが成功しなかった。

その後ロヨラは武力でオスマン帝国に対抗する十字軍的な発想を捨て、コレジョ・ロマーノ（ローマ学院、現ローマ大学）をはじめとするイエズス会の学校をヨーロッパ各地に建て、授業料を免除して会員に最高の教育を受けさせることにした。実践的な知性をそなえた優秀な宣教師を世界に送り出す方針は、一六世紀後半からイエズス会を飛躍的に発展させる。

トリエント公会議開催中にロヨラは死去し、彼が指示していたエチオピアやコンゴでのアフリカ宣教は進まなかった。ザビエルが念願した中国布教も、ザビエル死後三〇年間近く進展しなかった。ただし一五四七年以来マカオに来ていたポルトガルが中国との貿易に成功し、五七年から定住できるようになったため、宣教師もマカオで休息できるようになった。

イエズス会中興の第五代と言われた総長アクアヴィーヴァの下で、アジア全体を管轄する巡察師アレッサンドロ・ヴァリニャーノが一五七八年マカオに到着した。ヴァリニャーノは日本に行くまでの十カ月をマカオで過ごした間に、中国布教の大方針を立てた。中国ではアフリカや新大陸アメリカと違って現地の文化を尊重し、知識階級である文人に働きかけ中国語によってキリスト教を広めると決めたのだ。しかも文人層に近づく手がかりとして、ヨーロッパ科学を活用することも決定した。

総長アクアヴィーヴァ、管区長ヴァリニャーノ、インドから志願して来たマッテオ・リッチ[3]の三人は、ともにコレジョ・ロマーノ出身で実用科学の教育を受けていた。彼らが中国における文化適応策を採用し、ヨーロッパ科学を導入するため緊密に協力したことによって、一六世紀末に初めて中国布教の道が開けた。また一五七五年頃教皇グレゴリウス十三世（在位一五七二―八五）[4]はイエズス会に対して商業・銀行業への進出を許可したため、会の経済基盤が強化された。八二年末から中国に足を踏み入れた会士たちは絹貿易の利益を割り当てられ、布教活動に使うことができた。

三　イエズス会の変遷

一五八〇年代のイエズス会には、スペインのアメリカ大陸征服などを踏まえて中国征服論を唱える強硬な意見もあった。またアフリカでのポルトガル植民者の奴隷貿易に手を貸した会員もいた。しかし総長アクアヴィーヴァは一五九〇年に全管区に対して奴隷売買を禁止し、その監査を命じた。

ザビエルが中国へ向かった後に日本で後を継いだコスメ・デ・トレスは京都で迫害を受けて九州に支持者を求め、ポルトガル貿易で宣教師の協力を必要とした大村純忠のもとで、開港直後の長崎の一角にイエズス会の教会領を得た。ヴァリニャーノ管区長はイエズス会学院と日本人助手の養成所設立を決め、一五八二年に天正遣欧使節を連れてローマに向かった。四人の若い日本人使節は、教皇グレゴリウス十三世・スペイン王フェリペ二世の前でキリシタン大名大村の書簡を読み上げたと言われる。

一五八六年準管区長ガスパル・コエリョの政治的な発言

が豊臣秀吉周辺の警戒を呼び、翌年バテレン追放令が公布された。しかしヴァリニャーノがインド副王の使節として九一年に再度来日した時、秀吉は宣教師の日本滞在を黙認することにした。

一五九三年にマニラから来て長崎、京阪で宣教したフランシスコ会士は、イエズス会ほどには日本文化を顧慮しなかった。九六年のサン・フェリペ号事件の一因はこの二つのカトリック教団の対立にあったと言われるが、根本的な原因はスペインとポルトガルの政治的対立だった。サン・フェリペ号の航海士はポルトガルへの対抗意識から、スペイン王が日本を征服すると述べ秀吉を怒らせた。その翌年、フランシスコ会士とイエズス会士および信者の合計二七名が長崎で十字架にかけられた。

徳川家康は最初フィリピンとの仲介者であるスペイン宣教師の滞在を認めていたがキリスト教に反感を抱いており、幕府の艦隊修理をプロテスタント国のイギリス人に依頼した。徳川幕府は生糸貿易の管理を独占しようとして、マカオの絹貿易に介在するイエズス会神父を排除しようとした。一六一四年キリスト教禁教令以後の日本は、長崎大殉教（一六二二年）、島原の乱（一六三八年）を経て、プロテスタント国のオランダ人に居留地出島を認めるだけの鎖国体制に入った。イエズス会副管区長フェレイラ[5]は、拷問によって棄教させられた。

中国宣教についてはすでに述べたように、ヴァリニャーノ管区長とリッチたちは中国文化に適応する方針を貫いた。リッチは初めから中国の儒教儀礼は社会慣習であると見なして、宗教と区別する立場を取った。中国人の祖先祭祀も認めた。ただしリッチは古代の儒学はキリスト教と一致すると考え、儒学の古典に出てくる上帝はキリスト教の天主と同一であると述べたために、リッチ死後の一七世紀ヨーロッパで儀礼問題または典礼問題と呼ばれるイエズス会攻撃が起こる。

リッチは中国人の尊敬を得る方法はヨーロッパ科学、とくに数学・地理学・天文学だと確信し、教理問答集『天主実義』と並んで『幾何原本』『同文算指』『測量法義』『渾蓋通憲図説』ほかの科学書の漢訳出版と天文機器の製造に力を入れた。また明朝の万暦帝には自鳴鐘（時計）・大西洋琴などとともに『坤輿万国全図』を献上した。明末清初期に多くの中国人が協力し、イエズス会士関係著訳書[6]の出版ブームが起きる。これらの漢文著訳書は今日散逸してしまった本も多いが、三七点は一八世紀後半に清朝の「四庫全書」に収録された。

暦法を重視する中国王朝にとって、天文官としてのイエズス会士は欠かせない存在となる。一七世紀前半の明代には徐光啓・李之藻ら一部の文人・高官たちがイエズス会の天主教は儒教聖賢の教えに背かないと認めたり、明末の朝

廷が天主教に好意的だったことがあった。しかし満州族が支配する清代に入るとキリスト教布教は禁止され、一七一七年に宣教師追放令が出た。ところがその後も会士たちが清朝官吏として中国に滞在できたのは主としてヨーロッパ天文学のおかげであった。天文学だけでなく、イエズス会は測量・地理・建築・医学など多様な専門をもつ会員を中国に送り、王朝の地図作製、王宮建造、皇帝侍医など様々な分野で活躍した。ネルチンスク条約をはじめ対外交渉でも、通訳として清朝に仕えた。

一七世紀に中国に来た二二〇名のヨーロッパ人イエズス会士の足跡を見ると、皇帝側近や欽天監（天文台）の高官となって朝廷で厚遇されたのは一握りであり、広大な中国を布教し邪教として追放・迫害にあったり旅中に死去した者も多い。しかしヨーロッパ向けのイエズス会報告書は一六世紀末に入国したリッチが、欧州各国で翻訳されベストセラーになった『中国キリスト教布教史』を書いて以来、一八世紀に至るまで中国での布教活動がおおむね成功していることを基調にしていた。

上海の教堂

豊かな国土をもつ中華帝国は啓蒙専制君主の下で徳治が行われている、多くの中国人が教堂に来て会士に洗礼を受けた、キリスト教の奇跡が人々を救った、等々である。イエズス会士の報告に疑義を挟めるほど現場通のヨーロッパ人はまだ少なかった。イエズス会は教皇の支持を受けていたし、ヨーロッパのカトリック諸国では王の聴罪師のポストをイエズス会士が独占していた。商船が運ぶ中国磁器や絹織物も高値で取引され、一七、一八世紀ヨーロッパには中国への憧憬、中国趣味が起こっていた。

中国をはじめ世界各地におけるイエズス会の「成功」はヨーロッパで喧伝され、一八世紀半ばまでカトリック他教団を圧倒した。同時に嫉妬や競争、イエズス会活動への疑問も、ヨーロッパに生まれつつあった。一六四〇年代の中国にきたフランシスコ会士・ドミニコ会士は中国の祖先崇拝を容認しているイエズス会に対する疑問を表明し、教皇に提訴した。

典礼論争がヨーロッパカトリック諸国を揺さぶり、教皇

庁も巻き込んだ。攻撃文書が飛び交い、今日まで残る膨大な出版物が刊行された。イエズス会はイエスキリストの像を中国人にもたせておきながら、彼らに対しては孔子や釈迦の偶像崇拝や祖先崇拝の迷信を認めている、とドミニコ会・フランシスコ会・カプチン会・パリ外国宣教会の人々は言った。

フランスでイエズス会の迫害を受けたジャンセニストに同情するパスカル[7]は地下出版『プロヴァンシアル』（一六五六年）で、磔になったイエスの像を隠すイエズス会士は偽善的である、心の中でキリストを唱えるならば表向きは天帝や孔子を祀ってもかまわないというイエズス会は偶像崇拝を認めている、と批判した。無署名のこのパンフレットは大評判になり、イエズス会は手痛い打撃を受けた。

ついに一七一五年に教皇クレメンス十一世（在位一七〇〇－二一）は、中国のイエズス会に対して典礼禁止を命じた。これに対抗して清朝の康熙帝は宣教師追放令（一七一七年）を出した。

イエズス会へのもう一つの攻撃は、啓蒙主義に代表される一八世紀思想界からやって来た。異端審問などの締め付けにも屈せず、科学、歴史学、思想の諸分野では宗教離れが始まっていた。ヴォルテール[8]はわれわれヨーロッパ人は一七〇〇年もキリスト教について議論を重ねたあげく、中国人の信仰についてまで論争の種にしなければ気が済まないのだ、と典礼論争を冷ややかに見ていた。その上で彼はイエズス会が南米パラグワイの広大な敷地にイエズス会学校を建てたことを、権力的な野望とみなして『諸国民の習俗と精神についての試論』（一七五六年）で批判した。

一七五九年から十年間のうちにカトリック諸国ポルトガル・スペイン・フランスでイエズス会士追放令が出た。一七七三年に教皇クレメンス十四世（在位一七六九－七四）はイエズス会解散令を出した。北京に残っていたイエズス会の建物にはパリ外国宣教会ほかの宣教師が入ってきて、イエズス会士はその指令に服すよう命じられた。

振り返ってみるとイエズス会は設立以来、国を超えて組織されたカトリック普遍主義の教団であった。ポルトガル・スペイン・イタリア・ドイツ・フランス・オーストリア・ポーランド・ボヘミア・スイス・ベルギー・ドゥエー[9]などヨーロッパ各地で育ったイエズス会士が共同で布教した。出身国の対立はあったが、それがイエズス会では管区長の調整によってある程度押さえられた。東アジア各国でも日本・韓国・朝鮮・中国出身のイエズス会士が誕生し、活動に加わっていた。

しかし一八世紀ヨーロッパは軍国主義の時代を迎え、国益による各国の対立抗争が激しくなった。世界的にキリスト教布教の資金を出していたカトリック強国ポルトガル・スペインは、すでに大航海時代の勢力を失っていた。アジ

アの各地にはプロテスタント国のオランダ・イギリスが乗り出して来て、カトリック勢力は大部分の根拠地を奪われた。

ヨーロッパにおけるキリスト教世界も大きく変化していた。プロテスタントを擁するイングランドは、英国国教会（聖公会）を作っていた。アイルランド・ドイツでもカトリックは苦戦していた。イエズス会に多くの宣教師を送ってきたカトリック国フランスでも、トリエント公会議以後は教皇権からの独立を求めたガリア教会の特権が強くなった。一六六三年に創設されフランス語を母国語とする者のみが入会できるパリ外国宣教会は、アジアでの布教に専念しイエズス会に対抗した。安南・トンキン（ベトナム）では近代にもパリ外国宣教会員の殉教が続いた。

中国のイエズス会に一七二四年、三二年と祖先崇拝禁止を繰り返して命じ、ついに一七七三年にイエズス会解散令を出した教皇庁ローマ・カトリック教会も一八世紀末には弱体化した。フランス革命を拒否した教皇ピウス六世（在位一七七五―九九）は、教皇領に侵入したナポレオンに幽閉された。その後のピウス七世（在位一八〇〇―二三）がようやく教皇領を取り戻し、イエズス会再興も宣言した。東アジアにおけるキリスト教布教の枠組みは、列強時代に入った一八世紀後半から大転換し始める。キリスト教布教の担い手は、一九世紀にカトリックからプロテスタントに移っていく。

四　近代の東アジアキリスト教

プロテスタントの国イギリスがヨーロッパの中国像を変え、アジアにおけるキリスト教布教のベクトルに変化が起き始めるのは一八世紀中期からである。敵意あるしかも嘲笑的な中国観を初めて発信したイギリス海軍のジョージ・アンソンの『世界一周旅行』（一七四八年）がきっかけだった。アンソンは四〇年から五年間世界周航し広東に立ち寄った。広州港は公行貿易のみを許可しており、アンソンの食糧補給の希望を拒否した。しかしアンソンは封鎖をくぐり、賄賂によって旗艦の補給に成功した。この経験から彼は中国の海軍力は無力で、役人は腐敗していると判断した。清朝の貿易開港と外交条約の締結を一八世紀末に求めた英政府全権大使ジョージ・マカートニーも、アンソンの観測を補強した。

一八世紀中期までのヨーロッパにとって中国の参考書は、カトリック宣教師の報告書とりわけイエズス会士デュアルドの『中華帝国誌』（一七三五年）だった。イエズス会士が多年築いてきた徳治国家という中国のイメージは一八世紀後半までヨーロッパ大陸で続いた。しかしイエズス会解散後になると、清朝による度重なるキリスト教弾圧を

経てカトリック諸派の宣教師は、中国は悪魔に魅入られてデウスから見放された国であるという報告を送るようになった。

イギリスはもともとヨーロッパ大陸の中国趣味や中国びいきをあまりもたず、英海軍が報告した弱く腐敗した中国というイメージを受けいれた。中国が軍事的に弱く、貿易を認めないならば強制的に門戸を開かせるという政策は、一九世紀中期のアヘン戦争、その結果としての南京条約（一八四一年）以後の不幸な中英関係に結びつく。プロテスタント宣教師の草分けと言われるロバート・モリソンは、一八一〇年代から中国語辞典をマカオで出しはじめた。イギリス東インド会社の資金援助だったという。イギリスの『クォータリー・レヴュー』（一八一五年）は、初期イエズス会の報告は中国びいきで馬鹿げている、とフランスで二年前に出版された中国語大辞典を批判した。

カトリック宣教師は中国で少数になり、一九世紀にはイギリス・アメリカを中心にカナダ・北欧のプロテスタント宣教師が次々に入ってきた。もともとプロテスタントでは、各派の自律性を認めていたから九〇を超える教団が中国で活動した。プロテスタント宣教師が中国でキリスト教（基督教）を本格的に伝えるようになるのは、天津条約（一八五八年）、北京条約（一八六〇年）でキリスト教宣教が承認されてからであった。

プロテスタント宣教師の間でも祖先崇拝を認めるか否かの典礼問題は、明清時代のイエズス会と同様に議論を呼んだ。ただしカトリック布教の時代は、中国人の儒教儀礼を認めなければ宣教師は中国で布教できないことをリッチたちは良く認識していた。それだからイエズス会は初めから、祖先崇拝の儀礼は宗教ではなく社会慣習である、と承認した。

一九世紀のプロテスタント宣教では国際社会が中国に不平等条約を次々に押しつける中で、欧米宣教師は有利な条件のもとに活動した。プロテスタント側は中国の祖先崇拝を認めないままで、宣教した。典礼問題そのものを知らない宣教師も多かった。一八七〇年代に開かれたプロテスタント宣教師連合会議は、死者に対する孝道あるいは宗族結合の役割としてある程度理解したが、教会の行事としては祖先崇拝を容認しなかった。

近代における東アジア諸国へのプロテスタント宣教は、政治・経済・軍事で西欧が非西欧に対し優越と指導性をもった汎ヨーロッパ主義を基盤としていた。一九世紀の後半から二〇世紀の第一次世界大戦までは植民地主義の全盛期であった。キリスト教陣営はアジアに対して優越感をもち、西洋文明を背景にしてあたかも近代化の旗手のように登場してきた。

一九世紀末のプロテスタント教団は東アジア各地に病院

やミッションスクールを建てたり、また教育現場に携わり産業や衛生を指導し、これまで教育や啓蒙から阻害されていた民衆にも広く働きかけた。国王やローマ教皇の援助を受けた一八世紀までのカトリック宣教と異なって、プロテスタントは伝道先において自主・自立・自給伝道の方式を取った。宣教師は熱心に福音を伝えたが、聖書を無謬とする自己の教派を保守し東アジア固有の文化を深く知ろうとしなかった。

プロテスタント宣教の政教分離主義は列強の圧迫を受ける人々の眼には事なかれ主義・保守主義と映り、民族独立を目指す人たちをしばしば失望させた。シャーマニズムや朱子学伝統の衛正斥邪から圧迫されながら一八八〇年代末に広がった朝鮮キリスト教は、個人の魂を救い来世を約束するだけでなく、女性教育や迷信打破、高等教育機関の設立、個人財産の保護などで伝道初期には社会改革センターの役割を果たした。十字架は、権力に抵抗し民族独立のために闘う茨の道を象徴するものとなった。しかしプロテスタント宣教師は福音中心の現実逃避に陥り、とくに一九一九年の三一運動（朝鮮万歳事件）以後は政治に関与しなかったため、日本や列強の圧力に抵抗する朝鮮の人々は教会を離れていった。また不平等条約に悩む中国では宣教師を帝国主義の「走狗」とみなし、キリスト教を人民のアヘンと呼ぶ非基督教学生同盟が一九二二年に結成された。

西欧列強の支配を免れ中央集権国家を実現させた日本には、一八七三年（明治六年）切支丹禁制の高札が撤廃されると、キリスト教団は続々と宣教師を送った。すでに江戸末期の一八五九年から北米の長老教会ヘボン[10]ほか聖公会、アメリカ・オランダ改革派教会などのプロテスタント宣教師が来日していた。

熊本洋学校や札幌農学校が開校され宣教師の影響で初期キリスト教徒になった日本人は、士族出身者が多く武士的で外国人の伝道に対する自主独立意識が強かったと言われる。日本基督公会が外国の諸教派から独立することを宣言した時ヘボンは初め決議案に反対したが、一八七四年には賛成している。

一九三〇年代以降日本基督教会は、中国東北部、台湾、朝鮮で伝道を行った。日本軍が上海事件で中国非戦闘員の家屋や財産を焼き払った時、在留の欧米プロテスタント宣教師は日本への抗議声明を出したが、日本人牧師は日本側に立ったことが記録されている。

これまで見た東アジアキリスト教の流れをまとめると、ローマ・カトリック教会を中心に民族・国家を超えカトリック諸教団が宣教した一八世紀までと、聖書主義・万人祭司の性格をもつ欧米のプロテスタント各派が伝道した一九世紀以降の二つに大別することができる。ただしカト

リックの諸会は現在の東アジアで活発に活動しているし、プロテスタント宣教が百年を越えた二〇世紀後半の日本で、信徒数は全人口の一パーセントに満たない。

キリスト教側の東アジア世界への働きかけを筆者は概観してきたが、それでは東アジアの人々はキリスト教にどのように対峙してきたのか。東アジアの思想・文化にとって、キリスト教はどのような位置を占めてきたか。東アジア側の対キリスト教反応を把握することが、重要で複雑な課題として残っている。

注

〈1〉 景教流行碑はイエズス会士が中国で布教していた一六二三年に、陝西省西安で発見された。一六三八年にも福建省泉州で、フランシスコ会士が一四世紀に残したと見られる十字架の遺品が発掘された。古代の異端ネストリウス派およびカトリックのフランシスコ会はイエズス会と別組織であったが、キリスト教が古来中国に入っていた証拠として明末中国人の注目を集め、イエズス会に有利なニュースとなった。イエズス会の説く天主教を、一七世紀当時は景教と呼ぶ文人もいた。（大秦景教流行碑は西安の碑林に置かれ、二〇〇七年四月筆者が訪れた時も多言語の説明が飛び交う観光スポットになっていた。）

〈2〉 イグナティウス・デ・ロヨラ（一四九一頃―一五五六）はスペイン北部のバスク生まれ。フランス軍と戦い、一五二一年負傷したのち霊的体験を経て神学を志し、パリで学び修士となった。三四年にイエズス会創立。翌年ポルトガル王ジョアン三世が資金を提供し、インド・アフリカへの宣教を要請。ロヨラは霊性については論じないで、効果的な労働と黙想によって高い境地に行く目的意識をもっていた。イエズス会初代総長になる前のロヨラの書簡には、甥の進学を助ける申し出や修道院の改革を願う修道女への助言などに人間味が表れている。彼はプレスター・ジョンの伝説に心惹かれていた。

〈3〉 マッテオ・リッチ（利瑪竇、一五五二―一六一〇）はザビエルが亡くなった年にイタリアで生まれた。一五八三年中国南部に入国以来、ほとんど独力で中国知識人たちとの交友関係を切り開いた。瞿一族に始まり馮応京、沈一貫、馮琦、葉向高、曹于汴、徐光啓、李之藻ら南部出身文人の後ろ盾のお陰で、リッチは朝鮮出兵を控えた日本のスパイと思われたり、万暦帝への献上品を盗賊に奪われたりした多くの危機を切り抜けた。彼は中国文人の書斎に入った最初のヨーロッパ人と言われ、後続のキリスト教宣教師はみなリッチを見習え、そうすればうまくいくと助言を受けた。

〈4〉 グレゴリウス十三世は一五八二年の大勅書によるグレゴリウス暦（グレゴリオ暦）で有名。それまでのユリウス暦からの切り替えは、コレジョ・ロマーノのクラビウス（リッチの恩師でもある）の作業による。オランダ・イギ

リスなどのプロテスタント国ではグレゴリウス暦の採用は一八世紀に入ってからだった。グレゴリウス十三世はトリエント公会議で決まった教会改革を実行したが、サン・バルテルミーのユグノー虐殺（一五七二年）に感謝のミサをあげたり、教皇庁財政を破綻させたり問題を残した。

〈5〉クリストヴァオン・フェレイラ（沢野忠庵または忠安、一五八〇―一六五二）は棄教後、日本に帰化し宗門目明かしとして幕府のキリスト教禁止政策に協力させられた。転びバテレンフェレイラは海外で反響を呼び、その汚名を雪ごうとして禁教下の日本に、決死の覚悟をもつ宣教師の潜入が続いた。新井白石と対談し『西洋紀聞』を残したイエズス会士シドッチも、その一人と考えられる。

〈6〉イエズス会士関係著訳書の内容は、キリスト教（天主教）カテキズモ（教理問答）、欧州紹介、光学、幾何学、力学、暦学、測量学、地理学、論理学、西洋古典、教育学など様々で、しかも本の成立が西書の翻訳、イエズス会士と中国文人の共著、中国に来たイエズス会士の書き下ろし、中国人の単著などばらばらである。中国人によるキリスト教批判書もたくさん出ている。木版印刷も抄本もある著訳書が世界におよそ何点現存するか、まったく不明である。

イエズス会士関係著訳書を多数所蔵し閲覧に供しているのは、東アジア諸国よりはむしろヨーロッパ諸国の図書館、文書館である。これらの史料がすべてテキストデータベースとして世界各地で自由に閲覧できる日が待たれる。なお中国人とイエズス会士の協力によって一七、一八世紀に漢文で出版された著訳書の一部を、『イエズス会士と中国知識人』（山川出版社リブレット、二〇〇八年刊行予定）で紹介した。

〈7〉真空実験や遺稿『パンセ』で知られるブレーズ・パスカル（一六二三―六二）は、イエズス会の圧力で学校閉鎖を命じられた修道院と隠遁者集団であるポール・ロワイヤルを助けようと、匿名で宗教論争書『プロヴァンシアル』を書いた。当時イエズス会士はルイ十四世の聴罪師を務めており、イエズス会は国家の最も有力な団体であった。パスカルのシニカルで激しい攻撃文書に対して、イエズス会は十分に反論できなかった。『プロヴァンシアル』はフランス古典主義の名文と言われる。

〈8〉ヴォルテール（一六九四―一七七八）の本名はフランソワ＝マリー・アルーエ。啓蒙思想の代表的思想家。『ルイ十四世の世紀』『ピョートル大帝治下のロシア帝国の歴史』さらに戯曲『中国の孤児』などを著した。人間精神の発展に問題関心があり、『諸国民の習俗と精神についての試論』でインド・中国など東洋を重視し、『歴史哲学』（一七六五年）でキリスト教的歴史観の偏見打破につとめた。

〈9〉ドゥエーは国名ではなくフランス北部の地名。一六、一七世紀にはイングランドから追放されたカトリック教徒が住み着いて活動した。現在は人口四万余のドゥエー市。

〈10〉ジェームズ・ヘボン（一八一五―一九一一）はアメリカ長老派の医学博士。来日後福音書を和訳し、『和英語林

集成』を刊行。その第三版（一八八六年）で使用したローマ字綴りが、ヘボン式として普及した。

参考文献

アンダーウッド著、韓哲曦訳『朝鮮の呼び声』未来社、一九七六年。

岡本さえ『近世中国の比較思想』東京大学出版会、二〇〇〇年。

土肥昭夫『日本プロテスタント教会の成立と展開』日本基督教団出版局、一九七五年。

フィリップ・レクリヴァン著、垂水洋子訳『イエズス会』創元社、一九九六年。

山本澄子『中国キリスト教史研究』山川出版社、二〇〇六年。

黄一農『両頭蛇――明末清初的第一代天主教徒』国立清華大学出版社、二〇〇五年。

沈福偉『中西文化交流史』上海人民出版社、一九八五年。

李奭学『中国晩明與欧洲文学』中央研究院、二〇〇五年。

Michel Cartier : La Chine entre amour et haine. Declée de Brouver, 1998.